史　跡

上之国勝山館跡　Ⅰ

―― 昭和54年度発掘調査整備事業概報 ――

昭和37年　中村隆吉氏撮影

1980・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡　Ⅰ

――昭和54年度発掘調査整備事業概報――

1980・3

上ノ国町教育委員会

序

文化財を守り、未来に伝えることは現在の我々に課せられた重大な責務の一つであります。とくに、上ノ国町は北海道夜明けの地として、多くの文化財をかかえていて、一層その関心が強く、その保存に留意してきたところであります。

史跡上之国勝山館跡は、過去の歴史が示すとおり、松前藩祖武田信広の居館であり、二代光広が松前大館に居を移すまで、本道の政治、経済、文化の中心として位し、その後西海岸最北の和人居住地として守護が置かれ、北方鎮護に当った本道中世の館であります。

その後、町民の手により遺構は大切に保存され町民の心のよりどころとして保護されて来たところであり、昭和46年「上ノ国町総合開発計画」に復元整備が計画され、町費による保存管理事業が行われて参りました。

昭和51年以降、国、道費の補助と文化庁、北海道教育委員会のご指導と、数多の方々の御協力を得て、航空測量の実施、保存管理計画の策定、保存管理実施計画の樹立を経て、本年度を初年度とする発掘調査を伴う環境整備事業の着手をする運びとなったところであります。

未知の本道中世の館の発掘ということもあり、事業をお引受けくだされた北海道文化財保護協会、事業の推進に職員をご派遣くださいました松前町教育委員会、八雲町教育委員会、更に適切なるご指導を賜りました文化庁・北海道教育委員会、北海道埋文センターに対し衷心よりお礼申し上げます。

今後昭和60年を目途として継続事業として実施され、事業終了時には正式報告書として発刊を予定しておりますが、皆様の今後のご指導を仰ぎたく本年度事業の推進状況を参考までとまとめて発行することと致した次第であります。

この事業が今後着実に実施され、上之国中世史跡公園として多くの方々に公開出来ます日の一日の早からんことを念願するものであります。

昭和55年３月

北海道桧山郡上ノ国町教育委員会

教育長　青　柳　　隆

目　　次

Ⅰ　事業着手に至るまでの経過…… 1
Ⅱ　遺跡の概要…… 3
Ⅲ　発掘調査…… 3
　1　調査の経緯
　2　調査方法
　3　層序
　4　遺構・遺物
Ⅳ　土地買収事業・環境整備事業…… 5
Ⅴ　まとめ…… 6

例　　言

1．本書は、史跡上之国勝山館跡の昭和54年度発掘調査、環境整備事業について概要をまとめたものである。

2．本書は、Ⅰ、Ⅳを佐藤正雄、Ⅲ－2、Ⅲ－3を斉藤邦典、Ⅱ、Ⅲ－1、Ⅲ－4を松崎水穂、Ⅴを松崎・佐藤が分担し、編集総括を松崎が行った。尚挿図の作成は中村公宣が行った。

3．調査にあたっては土地所有者森米一、米澤光一、草間サユの各氏に多大の御協力を賜った。また地元作業員多数の御助力を受けた。

4．事業の推進に際し、文化庁記念物課、北海道大学工学部、北海道教育委員会文化課、北海道文化財保護協会、松前町教育委員会、八雲町教育委員会、北海道埋蔵文化財センターの各機関、仲野浩、足達富士夫、竹田輝雄、中村福彦、種市幸生、久保泰、森広樹、三浦孝一、寺林伸明の各氏から御指導と御協力を賜った。

5．土色の色彩については、「標準色彩図表A」（日本色彩研究所）を参考にした。

6．昭和54年度の保存整備事業は、10ヵ年計画の2年次にあたり、その事業の推進は、次の体制でのぞんだ。

調 査 主 体　　上ノ国町教育委員会教育長　青柳　隆
発掘調査担当　　北海道文化財保護協会
環境整備担当　　北海道大学工学部教授　　足達　富士夫
庶 務 担 当　　上ノ国町教育委員会文化課長　　佐藤　正雄

Ⅰ　事業着手に至るまでの経過

1．村人の心のよりどころ

〝殿様の城のあった所〟〝館神様のお山〟などと呼ばれ、村人に隣接の夷王山と共に親しまれて来たのである。

大正13年北海道庁より出版された「北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書」の中で河野常吉氏は勝山城址と名付け、『地勢南より北に傾斜し市街を隔てて海に臨む海抜320尺、両側にある天然の溪沢を利用し塹壕となし、山の後方を切り下げて要害となす…以下略…』と、その現状を説明し、その由来として『後花園天皇の長禄元年松前藩始祖武田信広蝦夷平定戦勝を賀して築城せりと伝う』と記し、更に『国法に依り永久の保存を希望す』と結んでいる。

昭和27年明治大学後藤守一教授により夷王山墳墓群の発掘が実施され『室町時代それ以前の和人の火葬墳であり、武田蠣崎一族の墓も含まれているであろう。北辺のこの地に百数十基の墳墓があったということは、北海道開拓の発祥の地として、記念すべき遺跡である。』と結論され、〝殿様の城のそばに、殿様のお墓がある〟と村人を喜ばせ、いよいよその保存に力を入れるようになったのである。

2．道史跡に指定されて

昭和34年夷王山墳墓群と共に、北海道指定史跡となるに及んで、町民の関心は一層高まり、文化財保護の思想が急速に高まって来ました。

昭和46年1月決定をみた「上ノ国町総合開発計画」において勝山館跡等の保護管理が盛り込まれ、その後町内外の方の浄財による「勝山館跡復元基金」が設けられるまでになった。

この計画を推進するために、町費による保存管理事業を行なうと共に、国指定史跡昇格の運動が展開されてきたところである。

昭和49年、文化庁仲野浩主任調査官が来町されて、勝山館跡、花沢館跡地域一円を踏査され、指定地一円の地勢調査の必要を教示され、国指定への気運は急速に盛り上って来た。町では、これを機会に北海道・東北一円の中世を研究する「北奥古代文化研究会の研究会」を開催すると共に町の文化財や伝承をまとめ「かみのくにの文化財と伝説」として発行するなどして、多くの人々に公開、紹介をしてきた。

これと共に、昭和50年8月勝山館跡、花沢館跡の国指定申請を提出した。

昭和50年10月、文化財審議会は勝山館跡、花沢館跡を国指定史跡として文部大臣に答申、いよいよ国指定史跡の実現に一歩踏み出したのである。

この間、今後の国指定を見込み、勝山館復元特別委員会を町独自で設け、江差町史編集委員宮下正司氏、松前町教育委員会文化財課長永田富智氏、函館市立博物館主任学芸員千代肇氏、上ノ国町郷土館嘱託学芸員松崎水穂氏に特別委員を委嘱すると共に、教育委員会に文化課を創設し佐藤正雄課長、斉藤邦典学芸員、中島勉社会教育指導員を配して、これが保存整備事業と国指定実現のために当らせた。

昭和51年国費150万円、道費75万円の補助を得て、航空測量及び実地測量を併用して該当地域5万平方米を500分の1に図化し、地域の全貌を把握するに至った。

3．国指定史跡となって

昭和52年4月12日（告示第60号）国指定史跡に指定され、文化庁、道教委の指導のもとに国費80万円、道費40万円の補助を得て「国指定史跡上之国勝山館跡、花沢館跡保存管理計画」を策定することとなった。

文化庁との数度の協議と特別委員の進言を得て館跡の歴史的解明と資料の蒐集、整備のための基本構想の樹立、地域の環境整備構想の3部門に分け策定することとし、歴史部門に一橋大学佐々木潤之介教授、北海道大学永井秀夫教授、松前町史編纂室長榎森進氏を、整備基本構想には松前町教育委員会文化財課長永田富智氏、環境整備に北海道大学足達富士夫教授を委嘱した。

館に関する資料の蒐集提供は、永田氏の協力を得て教育委員会文化課が担当した。

数度にわたる策定委員会議を開催し、歴史部門では、『上ノ国の館は、各歴史的段階に応じて、

その機能や役割に大きな変動がみられる。すなわちコシャマインの戦い以前に於ては記録上の花沢之館が中心的役割を果し、終結後から数年間は、信広の政治的地位の上昇もあって、天の川の北側に築かれた洲崎之館が支配の拠点となり、季繁没の寛正3年以降再び支配の拠点になり、永正11年大館移転後は、上ノ国の館は大館の副城ないし支域に位置づけられ、蠣崎家の一族が守ったこと。更に天文11年、上ノ国、知内を境に和人地が成立するや、異民族に対する防禦的性格を薄くし、大館を中心とする蠣崎氏領域支配の中で西部地域支配のための地方行政機関に変質していった。以上のような史料上の上ノ国の各館と現在と館址の表面観察とに基づいて、三つの館址の発掘調査の結果を待って整備していくべきである』と結論づけられた。

これを受け保存管理計画の基本構想を次の様にまとめた。

1．事業主体　上ノ国町
2．事業実施期間　昭和53年度より10ヵ年
3．実施方針　別紙による
4．現状変更
(1) 指定地内の建造物、工作物の建築は原則として認めない。
(2) 指定地内の伐木、植林等は自然の荒廃を来たさない程度において認める。
(3) 指定地以外の周辺台地は、自然公園特別地域として指定して規制をはかる。
5．実施する主なる事業
(1) 民有地　宗教法人所有の土地買収
(2) 館遺構および周辺の発掘および調査
(3) 修復および環境整備
(4) 史跡の保存と文化財の管理
6．史跡指定地外地域の環境整備
(1) 夷王山および墳墓群について、指定地との関連その史的価値を明瞭にするため発掘調査等を実施する。
(2) 比石館、洲崎館および上国寺等の国指定推進をはかり、全町の歴史を網羅する〝上ノ国中世史跡公園〟を策定する。

更に、この基本構想に従って具体的実施方針を樹立し、事業費5億円、発掘調査等により得た史料保存のための〝上ノ国中世資料館（仮称）の新設などの方針を打ち出した。

また、環境整備の構想として、

1．遺跡整備の方針
(1) 遺構の整備、道路、利便施設等の建設も調査と並行して行うこと。
(2) 史実に基ずく復元以外はしない。
(3) 復元は必要最少限とし「歴史の表現」を重視し、現状を尊重する。
2．広域的整備
(1) 史跡指定地のみでなく、一つの景観としてとらえる。
(2) 史跡、伝説地等をつなぐ見学コースとしての整備を考える。
(3) 集落の雰囲気を保存するため、建築物に対する指導、助言を行うこと。
(4) 都市計画の策定をすすめる。
3．関連施設の整備
(1) 歴史資料館を設ける。
(2) 資料館は総合文化施設構想により、公民館図書館、視聴覚ライブラリーなどの機能をもつものにする。
(3) 休憩所、便所など必要最少限設けるが、位置、デザイン等周辺の環境を考慮すること。
(4) 道路、資料館、利便施設は、歴史的なものを転用・活用する。

などの基本方針を基にして、指定地域、墳墓群、緑地保存区域、景観保全区域、道路、駐車場、標識、案内板、利便施設等の項目に更に具体的な整備の方法について定めた。

このようにして策定された保存管理計画に基づいて、昭和53年度、上ノ国町教育委員会は、文化庁、道教育委員会と数度の協議を重ねると共に、策定委員の助言を得て、年度別事業実施計画を策定した。

4．保存管理事業に着手して

昭和54年度、土地買収事業費11,104千円、環境整備及び発掘調査事業費4,000千円の予算を計上し、国、道費の補助を得て着手した。

詳細については、後述の各項により紹介したい。尚、発掘調査については、北海道文化財保護協会に委託し、事業の推進に当った。

Ⅱ　遺跡の概要

遺跡の所在地は桧山郡上ノ国町字勝山390番地他。上ノ国市街地南西に位置する。

上ノ国町の北部を木古内町との町界、稲穂峠に源を発する天ノ川が東西に貫流し日本海に注ぐ。又上ノ国町の南松前町との町界大千軒岳から北へ伸びる主尾根が標高180m前後の八幡野を経て日本海へ達している。八幡野からこの天ノ川に向って口を開く小さな谷が北西から南東に並列する。遺跡はこの谷のうち寺ノ沢川と宮ノ沢川に刻まれた南北に伸びる台地及びその周囲である。指定面積約209,343㎡。南北500m、東西最長270mを測る。標高15m～113m。縄文時代中期の標式遺跡勝山館遺跡[①]をその中に含む。

館前面に三段の平坦面が形成され、後方頂部に文明5年（1473）創立と伝える館神八幡宮跡とそれを囲む土塁、その背後南に空掘り跡が残る。指定範囲外南端に接して〝つるの池〟といわれる貯水跡が知られている。

館をのせる台地東を流れる宮ノ沢川は、その上流で華ノ沢、宮ノ沢、桧ノ沢等に岐れる。華ノ沢と宮ノ沢に刻まれた一段低い台地は〝侍屋敷〟と伝えられており、土塁が残されている。耕作時には古銭等が採集されたという。[②]

又西側寺ノ沢には、石を築いた貯水跡が残されている。

館の西南に寺ノ沢をはさんで、標高159mの夷王山があり、百数十基からなる北海道指定史跡夷王山墳墓群が五地区に亘り館の後方を囲むように群在する。[③]第1地区は、〝つるの池〟を間にして館の南端に接し、第3地区は勝山館と夷王山を結ぶ線上にある。第2地区は第1、第3地区の間に、第4、第5地区は第3地区北西に位置する。

夷王山山頂からは館の内部が一望される。更に北は、江差町を経て大成町太田岬までの海岸線、東は天ノ川沿いに上流木古内方向が、更に南西には松前小島をのぞむことが出来る。日本海には奥尻島、渡島大島が浮ぶ。

他方八幡野の一角を介すると、南西2.3km余、町内石崎所在、厚谷重政の居館比石館を視野にとらえ得る。眼下には天ノ川の北、長禄元年(1457)の闘いに勝ちを得た武田信広が同二年築いた洲崎館をみる。

このように、夷王山を擁するこの勝山館は全ゆる方向に眺望のきく極めて条件に恵まれた立地をなしている。尚、東へ1.0km余隔てた国指定史跡上之国花沢館跡は、八幡野から北東に伸びる尾根に遮ぎられ目にすることができない。

勝山館、花沢館等に関する文献学的考証は、既になされているため、ここでは触れなかった。[④]

注）① 渡辺兼庸、「北海道檜川、十兵衛沢、勝山館遺跡」考古学雑誌44巻4号、昭和34年。

② 大場利夫他、「桧山南部の遺跡」昭和30年、上ノ国村教育委員会。

③ 本墳墓群は昭和27年明治大学、39年北海道教育委員会により発掘調査が行われ、参加者等により1部内容が示されている。火葬骨を埋納する室町時代乃至それ以前の和人の墓といわれる。文献(3)、(10)、(15)～(18)

④ 文献(2)に於て過去の諸説が整理されている。

Ⅲ　発掘調査

1．調査の経緯

北海道教育庁文化課主査、竹田輝雄氏の指導のもと次の各氏が調査にあたった。

松前町教育委員会久保泰氏、八雲町教育委員会三浦孝一氏、北海道埋蔵文化財センター寺林伸明氏。調査期間は54年9月10日～同10月9日である。尚上ノ国町教育委員会斉藤邦典、松崎水穂、井上真理子が随時参加した。又、乙部町教育委員会森広樹氏には調査期間中種々有益な御助言をいただいた。

54年度調査は伝えられる空堀の有無、規模の確認を目標としたものである。調査面積400㎡。

2．調査の方法

発掘区を館をのせている台地の空堀があると言われている部分に設定した。

グリッドは4m×4mを1単位とし、ほぼ北西より南東へA～M区とし、北東より南西へ1～9区とし直交させ、グリッドの呼称はA1区…B1…区とした。（以下A～Mを東西、1～9を南北ラインと略称する。）

調査に際しては、まず南北のグリッドラインにそって3m×10mの規模でトレンチを4本設定し、空堀を確認し、順次平面的に発掘区全体を基盤まで掘り下げていった。

また館のほぼ中央を縦断している遊歩道が空堀を横断している可能性が強いので、遊歩道東側をB地点と仮称し、南北のグリッドラインにそって3.50m×8.50mのトレンチを設定した。

その結果空堀の一部が確認された。

遺物の取り上げは各グリッドごとにレベル、層位を附して行なった。

尚遺物は陶磁器類とその他の遺物とに二分して取り上げた。

発掘面積は400㎡、25グリッド行なった。

土層観察面は空堀の堆積状況を把握するため南北のグリッドラインにそったトレンチの壁面そしてB地点トレンチ北西壁面に設定し、さらに発掘区全体の基本的層序を把握するためにA地点南東端の南北ライン、南西端の東西ラインに設定した。

3．層　　序

基本的層序は次の通りである。

Ⅰ層……黒色腐植土、笹の根多量に入りこむ　厚さ20cm程度。

Ⅱ層……暗褐色土　砂礫粒含有　やわらかくわずかに粘性あり。
厚さ10cm程度

Ⅲ層……茶褐色土　ややしまりあり　厚さ20cm程度　渡島大島のものと思われる白色火山灰が層中にブロック状に混入。

Ⅳ層……淡緑色凝灰岩質基盤

なお、発掘区内の一部では基盤と思われる面が赤褐色を呈しているがⅣ層の基盤と同質のものかは不明。

空堀横断面の最も深い箇所の堆積状況は次の通りである。

1．黒色腐植土……笹の根多量に入りこむ　厚さ20cm程度（Ⅰ層）

2．暗褐色土……乾燥が速い　わずかに粘性あり　厚さ20cm程度（Ⅱ層）

3．茶褐色土……ややしまりあり　渡島大島のものと思われる白色火山灰、火山性砂粒状堆積物がブロック状に混入　砂礫粒わずかに含有　厚さ20cm程度（Ⅲ－1層）

4．灰褐色土……凝灰岩質砂粒が含有された火山性砂粒状堆積物ブロック状に混入　しまりあり
厚さ10cm程度（Ⅲ－2層）

5．黄褐色土……砂礫粒含有、8㎤大の凝灰岩質の礫が空堀中央部に集中　砂礫質である。

6．灰緑色土……砂礫粒が主成分でありくずれやすい　凝灰岩質砂粒含有。

5、6とも厚さ10cm程度で交互に重なり合い基盤まで厚さ80cm程度である。

7．基盤……淡緑色凝灰岩質基盤

5、6は空堀覆土のため基本層序には比定できないと思われる。

全体として下層にいく程砂礫質となる。

尚細分していくと16層になるが、大きく分けると上記の通りとなると思われる。

4．遺構、遺物

1）遺構　調査地区A地点において東西約25mにわたる堀が検出された。最大巾1.8m、深さ表土下1.8mを数える。表土下50cmで凝灰岩質基盤に達するがこれを掘り下げて堀を形成する。断面V字型の薬研堀である。堀の中、途中に段差を有し、西側沢より上ると次第に浅くなり堀の外へでてしまう。また西半、沢に近い部分には、底に巾20cm深さ15cm程の浅い溝が認められた。堀の北側は館神八幡宮跡を巡る土塁頂部まで、ほぼ直線的に切り下げているものと推され、比高差は7mに達する。

更に現在館の中央を通る遊歩道(旧御代参道路)[1]東側B地点において同様の形状の堀を確認した。

この堀の南、調査地区A地点南西隅にグリッド軸に斜向して上巾2m、下巾1m、深さ1.8m断面逆梯形の箱薬研堀の一部と思われるものが5m検出された。その外側斜面には径20cm深さ60cmの穴が斜めにあけられ中から炭化物が検出された。

薬研堀に連続する館神八幡宮跡を巡る土塁は、館の中央を通る遊歩道によって両断されている。この道路に面した土塁両側面を精査断面観察を行った。その結果、凝灰岩質基盤が最も高まっている部分とこの土塁が一致することが認められた。更に、西側面において径1m、深さ1.4mに凝灰岩質基盤をほった掘り方とその中央に径20cmの柱痕跡が認められた。この柱痕跡中の覆土に白色火山灰が底面近くに流入している。

調査区域内に於て他に東西に走る浅い溝、ピット等が検出された。

薬研堀は両側の沢下までは調査しておらず、詳細は不明である。遊歩道によって東西に分断されてはいるが、館の後方に巡るものと推される。この場合、館内部と南方との連絡施設、方法が存在したものと思われる。箱薬研掘（？）については、小部分の検出であり方向、規模等は不明である。堀、溝等相互の前後関係についても調査範囲が狭く明らかになし得ない。

又、層序の項でも述べているが、一部に於て、赤色、緑色等粘質土層が層状をなしていたが、再堆積（地業等）によるものかどうか明らかになし得なかった。

2)遺物　調査区内より陶磁器片121点、鉄片29点、古銭24点、刀の断片1点、キセル1点、動物骨片134点、縄文時代の土器石器27点が出土した。

陶磁器には珠洲焼系の摺鉢、抹茶用の茶碗、青磁（器種不明）等の破片がある。古銭は「寛永通宝」及び「政和通宝」「元〇通宝」等である。動物骨は馬と推される。いづれも整理中であり詳しくは述べられない。

尚、縄文時代の遺物については細片のため不明である。従来縄文時代中期の標式遺跡として知られている勝山館遺跡の調査地区は本調査地区の150m余り北東に位置し、本地区は今まで縄文時代の遺跡範囲としては知られていない。②

注）① 松前藩政がしかれて後、毎年1月藩主名代が『上ノ国視廟詣』といって上ノ国三社（毘沙門天王社、館神八幡宮、夷王山神社）に詣でた。これにより御代参道路の名を今に伝えている。

② 渡辺兼庸氏の御教示による。

Ⅳ　土地買収事業、環境整備事業

1．土地買収事業

年度別事業実施計画に基づいて、史跡上之国勝山館の後部台地と武家屋敷跡と伝えられる平地、11,898平方米について、総事業費11,104千円をもって（国費8,883千円。道費1,110千円の補助）土地買収事業に着手した。

買収予定地は、民有地、社寺所有地であり、指定地区の関係で分筆必要地4筆があるため、アジア航測株式会社札幌支店に地積及び境界測量を委託して、買収予定地の範囲及地積を把握すると共に、桧山南部森林組合に立木の求積を委託して、買収地の現況資料を整え、買収交渉に入った。

さいわい、当該地の所有者は史跡保存の心暖かく、「文化財保存のためであるならば」と買収に応じてくれ、神社庁の許可を必要とする寺社有地を除く民有地を予定通り買収することが出来た。

2．環境整備事業

事業費4,000千円（国費2,000千円、道費1,000千円の補助）のうち、発掘調査費2,100千円、環境整備費1,900千円で着手した。

文化庁、道教委と数度にわたる協議と、環境整備専門委員として委嘱している北海道大学足達富士夫教授の指導により、発掘跡地は、次年度以降の調査結果を待って整備に着手することとし、崩壊を防止するためコモで全面を覆い保全することにした。

その外、指定地域境界柱44本、指定地入口を示す案内板2柱、指定地説明板を総檜作りで一基製作して指定地入口に建築した。

Ⅴ ま と め

武田信広の居城、勝山城と地元の人達が伝える上之国勝山館跡に本格的発掘調査の手が加えられた。言い伝え通り、館後方に〝堀〟が巡り、更に、形状の異なる堀、溝等の存在も予測され、勝山館の形成が単純なものではないことが伺がわれた。

調査の開始とともに町民の関心も１段とたかまり、今までわからずにいた〝つるの池〟の位置、未知の石積みの貯水施設等についての情報が得られ館の範囲に新たな問題を投じている。

遺物は整理中であるが、北宋銭、寛永通宝、茶器等の出土は、存続期間に巾のあることを示すようである。尚、既に表面採集によって得られている資料等も併せ、整理をすすめている。

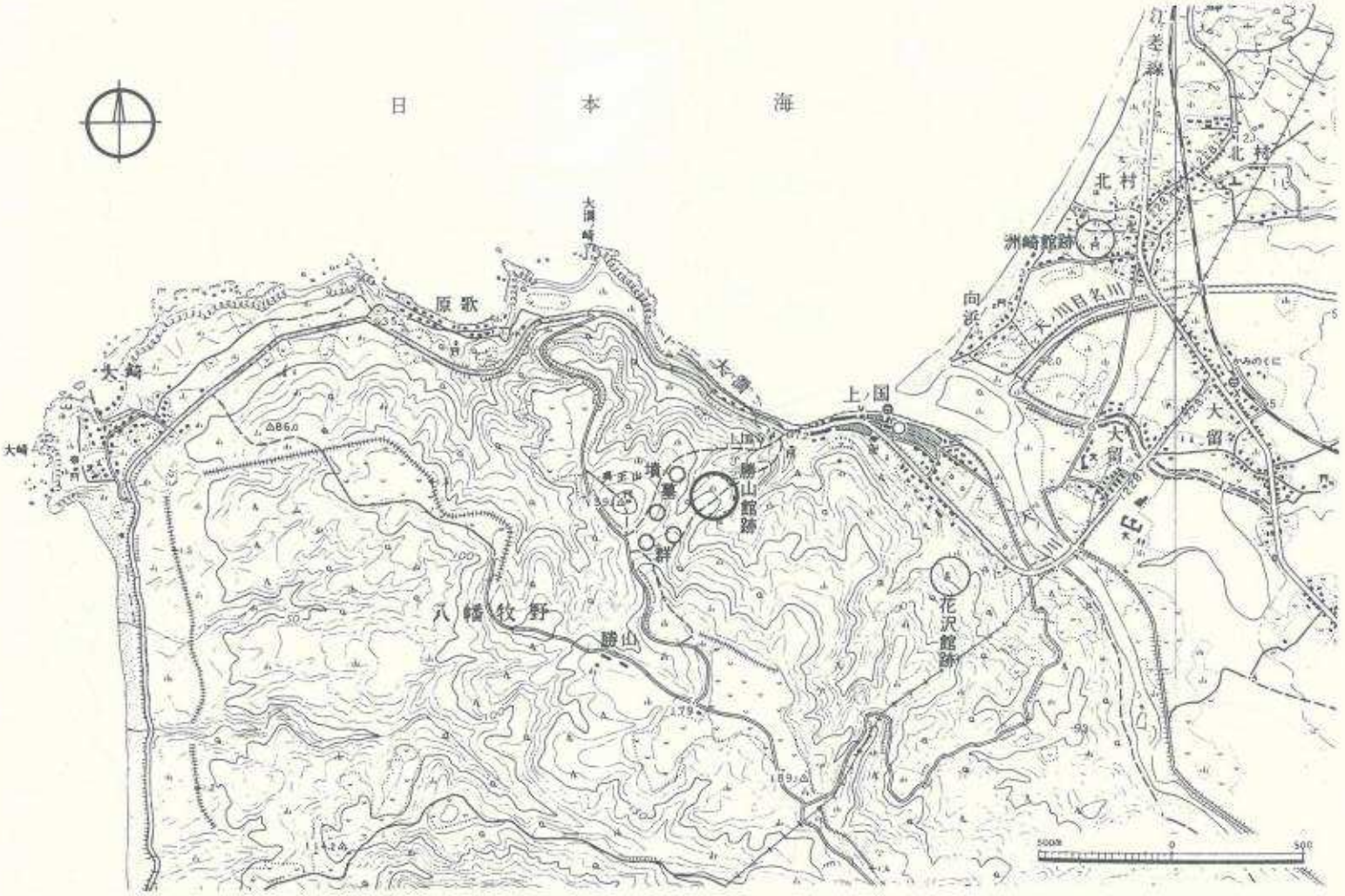
調査規模も小さく、種々の問題の解決には到っていないが今後調査内容を充実させ勝山館をはじめ上ノ国の諸館の関係等を明らかにして行きたい。

先学諸氏の御教導をお願い申し上げる次第である。

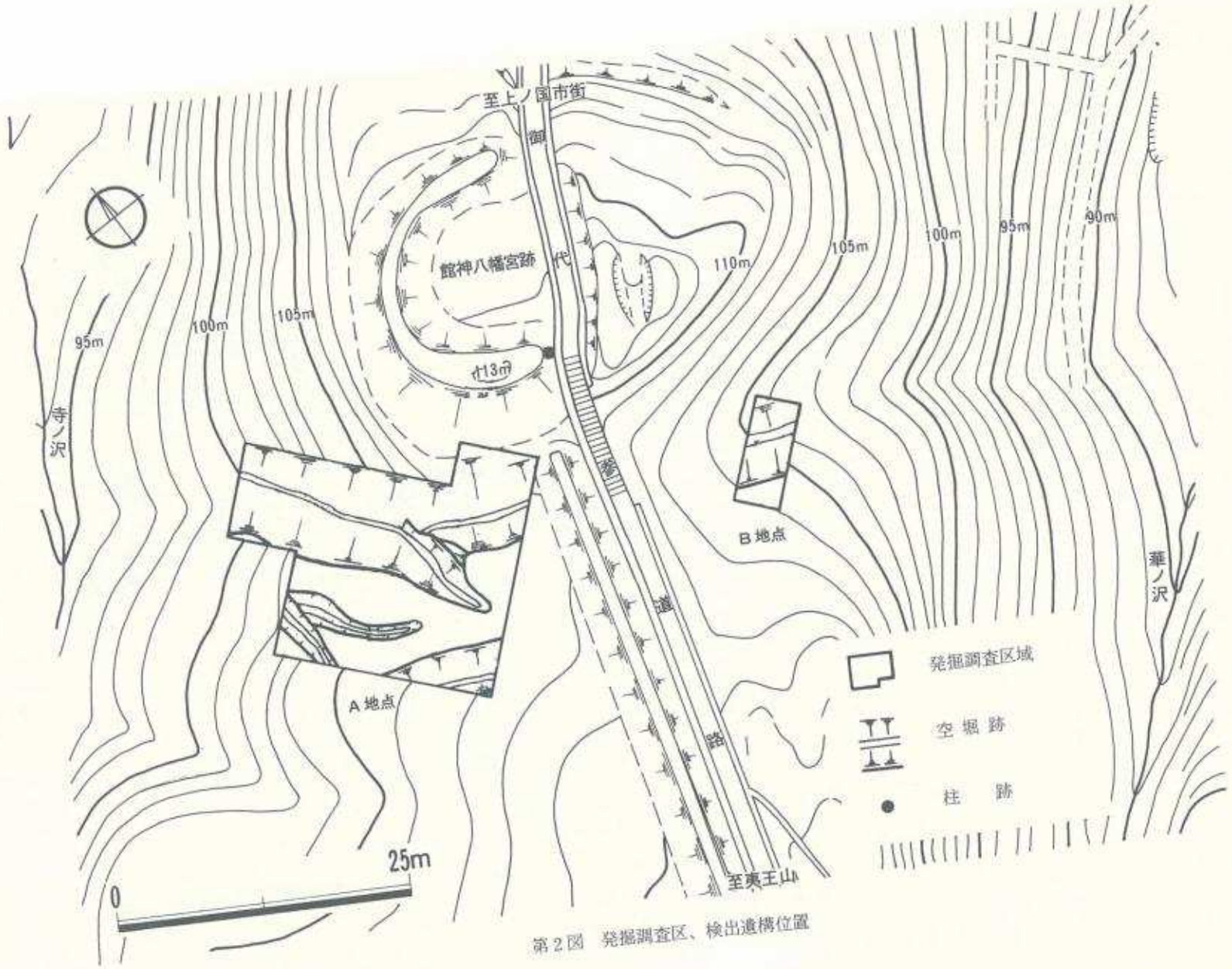
また細部にわたる年度別事業実施計画を樹立していたにも拘らず、発掘調査の結果等により急拠事業を変更する等の事情が生じたことは止むを得ないことであったが、これらの事態によろしく指示、指導をくだされた文化庁、道教委、事業の推進のために期間内完成のために力添えくだされた町役場建設課に深甚なる謝意を表したい。

参 考 文 献

1）「朝倉氏史跡公園基本構想」昭和47年　近畿都市学会
2）足達富士夫他「史跡上之国勝山館跡、花澤館跡・保存管理計画書」昭和53年　上ノ国町教育委員会
3）「夷王山墳墓群発掘調査概要報告書」昭和39年　北海道教育委員会（油印）
4）「一乗谷朝倉氏遺跡Ⅰ」昭和44年足羽町教育委員会　昭和46年　福井市教育委員会
5）特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡Ⅲ」昭和47年　福井県教育委員会
6）特別史跡「一乗谷朝倉氏遺跡Ⅵ」昭和50年　福井県教育委員会　朝倉氏遺跡調査研究所
7）伊禮正雄「中世城館址の調査」　考古資料の見方（遺跡編）　昭和52年
8）岩本義雄他「尻八館第２次調査概要」　青森県立郷土館調査研究年報第４号　1978　昭和54年
9）大場利夫他「桧山南部の遺跡」　昭和30年　上ノ国村教育委員会
10）加藤邦雄「北海道」　新版仏教考古学講座第７巻
11）「上ノ国町総合開発計画基本構想」昭和46年　上ノ国町
12）「紀伊風土記の丘」建設概要　昭和48年　和歌山県教育委員会
13）河野常吉「北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書」　大正13年　北海道庁
14）「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第１集　昭和54年　八戸市教育委員会
15）永田富智「上ノ国への和人定着年代について」　新しい道史27号　昭和42年
16）松崎岩穂「上ノ国村史」　昭和31年　上ノ国村
17）松崎岩穂「続上ノ国村史」　昭和37年　上ノ国村
18）宮下正司「夷王山周辺の古墳墓(一)～(三)」　広報かみのくにNo.184～186　昭和50年　上ノ国町役場
19）渡辺兼庸「北海道檜川、十兵衛沢、勝山館遺跡」　考古学雑誌44巻第４号、　昭和34年
20）渡辺兼庸「北海道桧山郡宮ノ沢遺跡」　考古学雑誌56巻第１号　昭和45年

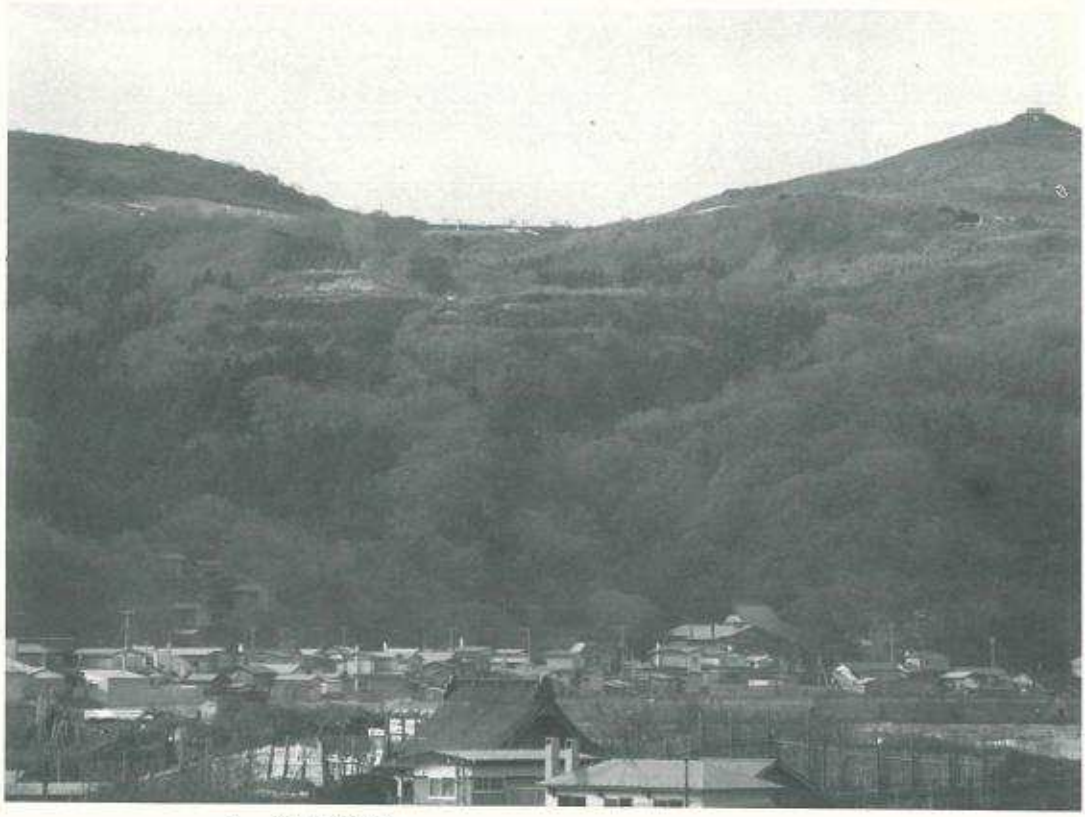


第1図　遺跡位置（国土地理院1：25,000　上ノ国）



第2図　発掘調査区、検出遺構位置

PL. 1



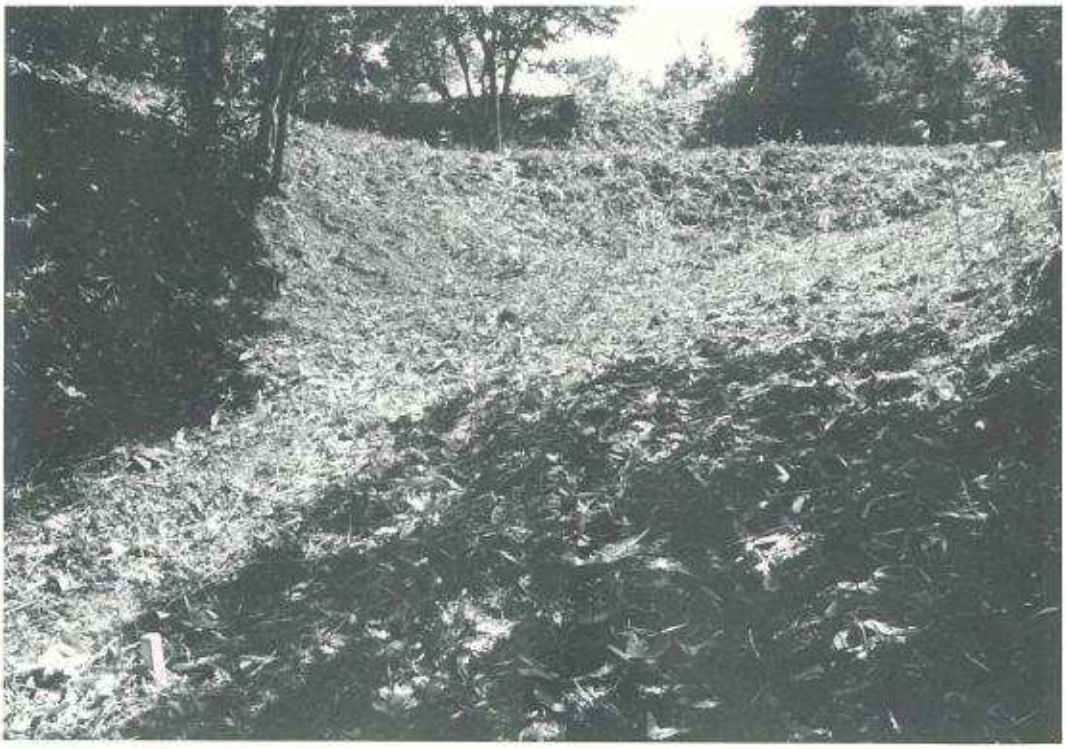
1　勝山館遠景

―右上奥王山、白い標柱柵列は左より墳群第1～第4地区
集落は上ノ国市街、中央右下上国寺本堂　天ノ川北岸　洲崎館より―

2　勝山館内部

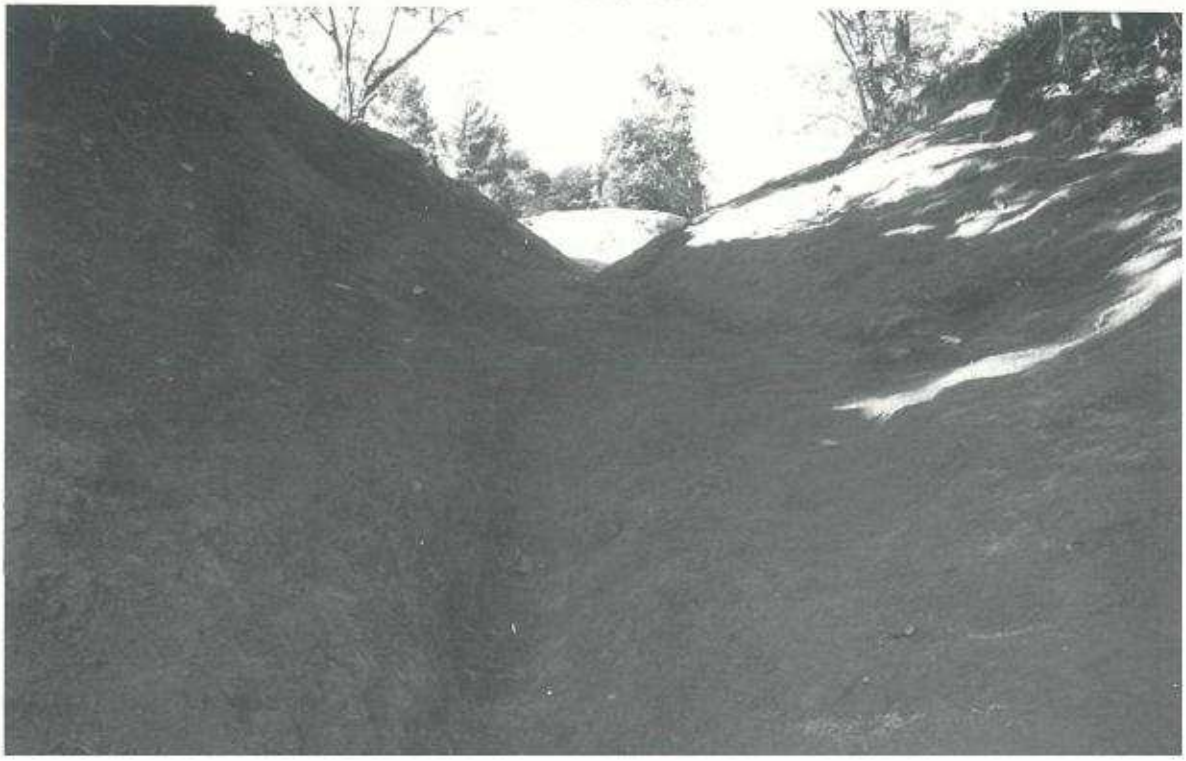
―南西上空より　中央下部が54年度調査地区―
昭和37年　中村隆吉氏撮影

PL. 3



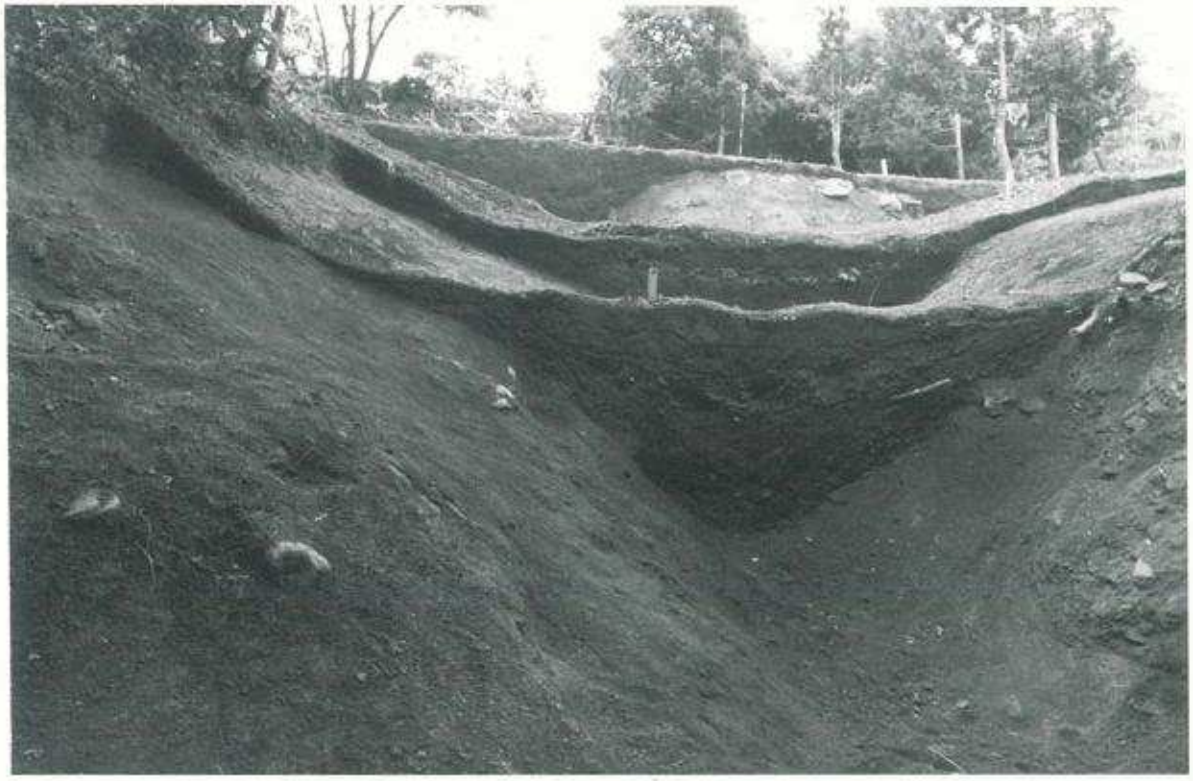
1　調査前の空堀跡　―北西寺ノ沢より―

2　調査後の空堀跡
―中央に浅い溝が検出された　北西寺ノ沢より―



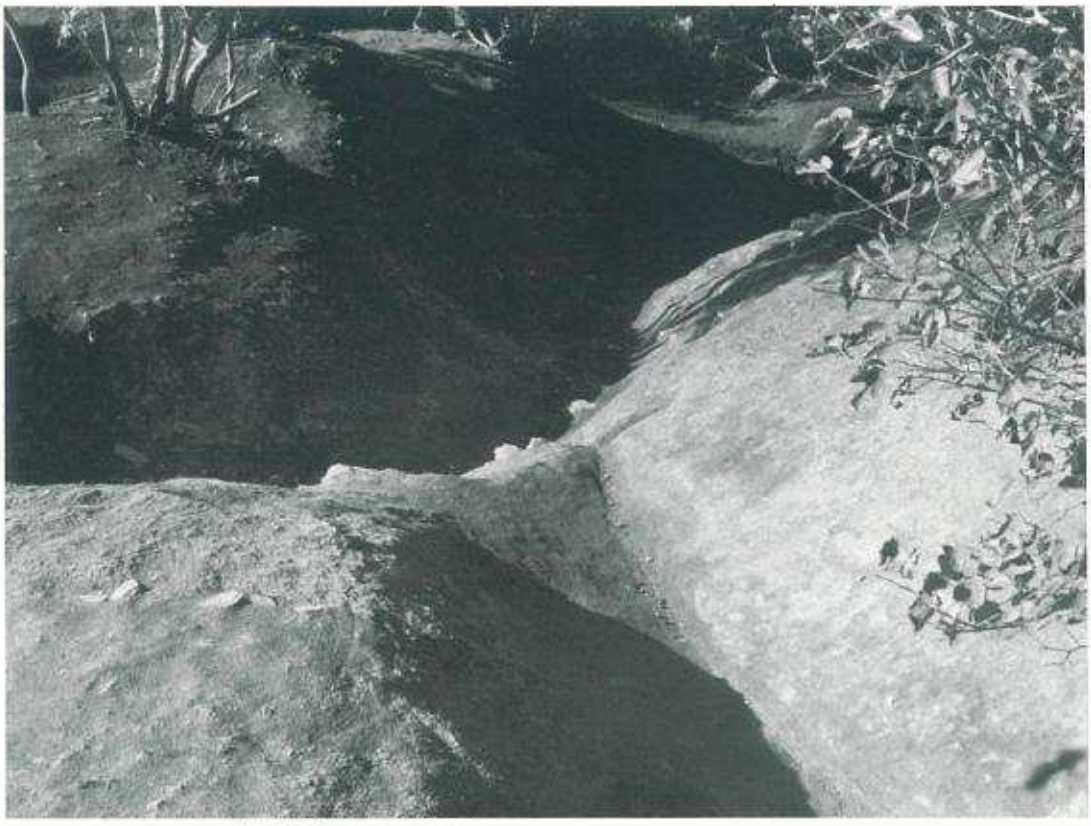
PL. 4

1　空堀内土層堆積状況－調査区北西端、南東より－



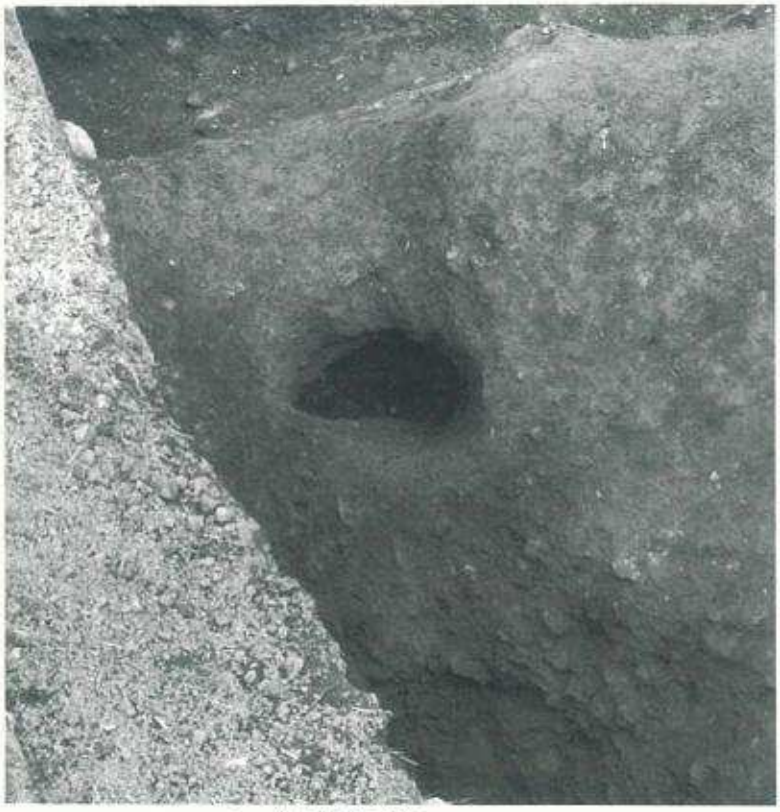
2　空堀内土層堆積状況－北西寺ノ沢より－

3　空堀内土層堆積状況－調査区北東端－

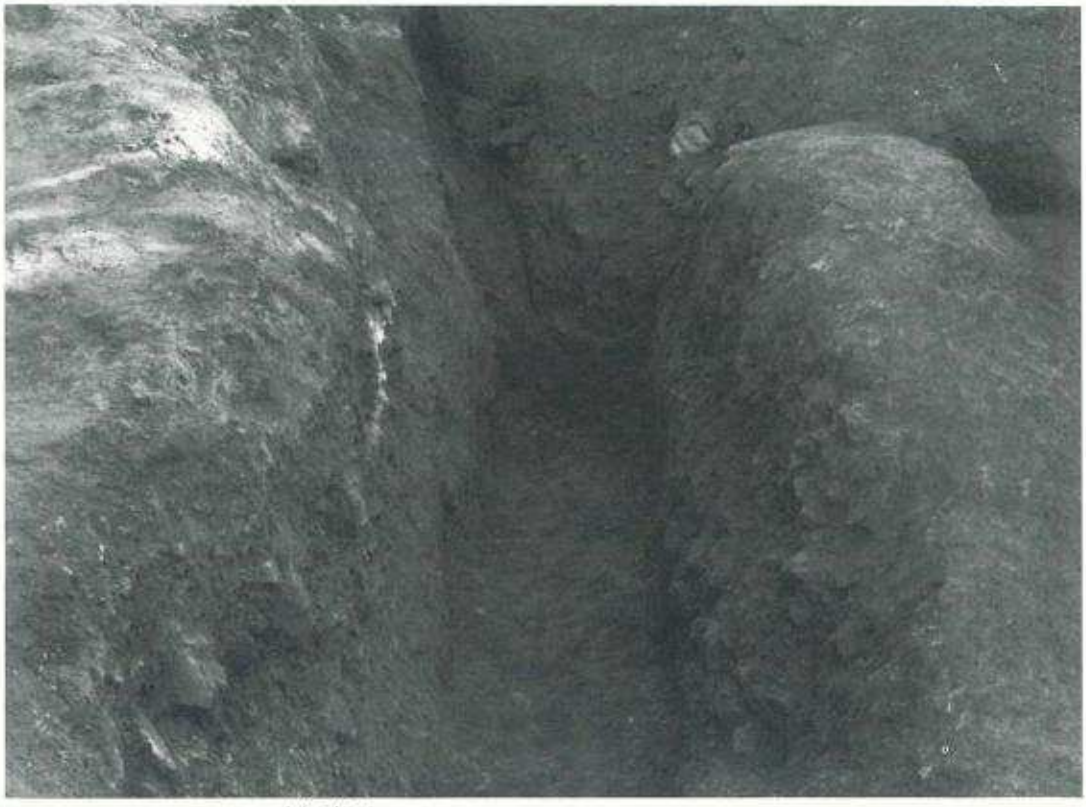


1　空堀内部－調査区北東部－

2　空堀の状況－調査区南西部－



1　空堀外壁の穴

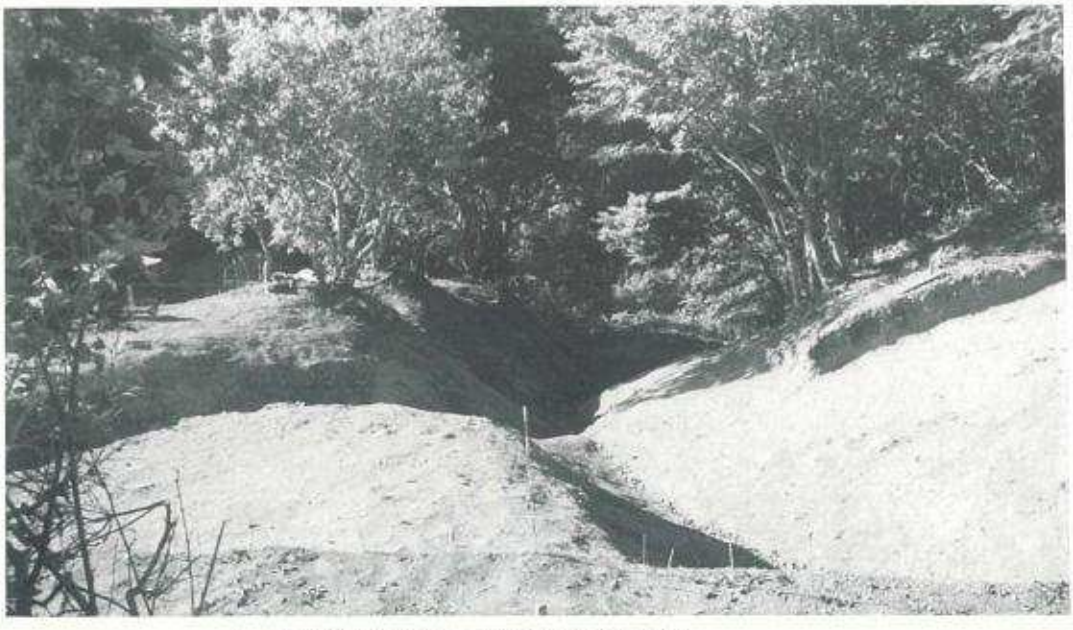


2　空堀内部－調査区南西端、北西より－

1　柱跡断面 ―下部に白色火山灰が堆積する―

2　調査終了間際の状況
―北東より―

1　調査前の空堀跡—北東より寺ノ沢をのぞむ—



2　調査後の空堀跡—北東より寺の沢をのぞむ—

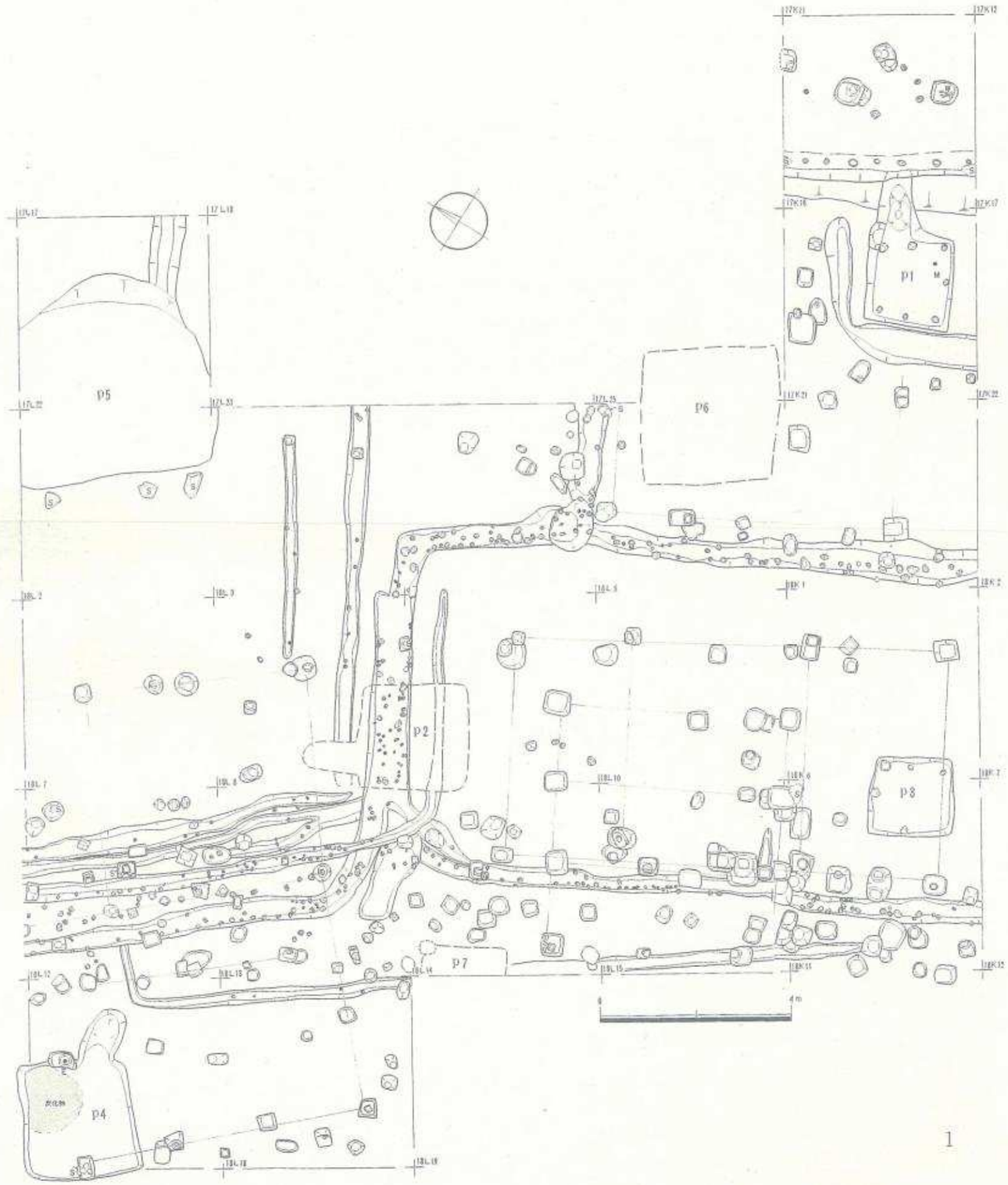
史跡上之国勝山館跡　I
―― 昭和54年度発掘調査・環境整備事業 ――

発　行　　上ノ国町教育委員会

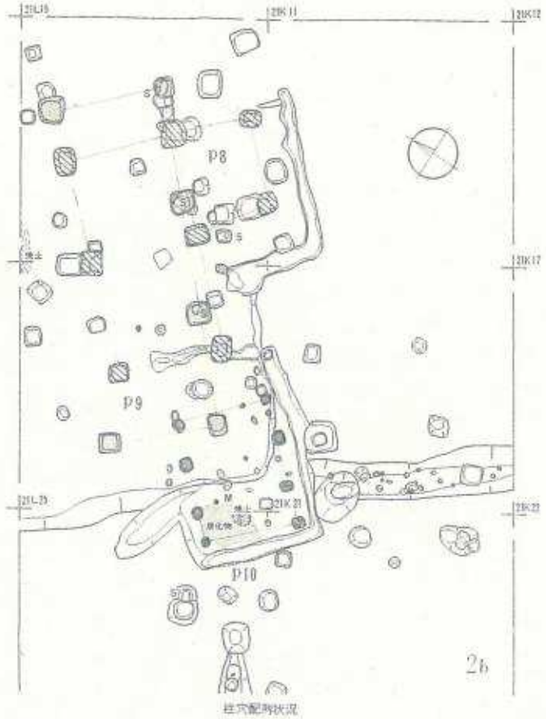
印　刷　　昭和55年３月25日
発　行　　昭和55年３月31日
印刷所　　富士プリント株式会社

25I.
25K.
25J
26I.
26K.
26J
27I.
27K
27J
(空堀A)
(空堀B)
(空堀C)
(浅い溝)
54年度発掘区
0
10m

附図-1　遺跡実測図



1



附図-2　遺物跡・竪穴遺構実測図(1,2)